I. 公開シンポジウム

東日本大震災10年のこれまでとこれから

―学力とコンピテンシー―

　　司会・コーディネーター

梅原　利夫（和光大学 名誉教授）

田端　健人（宮 城 教 育 大 学）

　　提案者

吉田　 剛（宮 城 教 育 大 学）

市瀬　智紀（宮 城 教 育 大 学）

本図　愛実（宮 城 教 育 大 学）

三浦　浩喜（福 島 大 学）

（１）梅原利夫「テーマ設定趣旨」

3.11東日本大震災・福島原発事故から10年半が過ぎた。現在地球上は、コロナ・パンデミックの渦中にある。いずれも人災面を色濃く受けた災禍であった。私たちは、災禍を受けた同時代人として、次世代の人格を育てるべく、その生活と学習をどのように支援し指導してきただろうか。

人格を形成する教育的働きかけの中心にある「学力とコンピテンシー」に注目して、この10年を振り返り、現在を見すえ、未来を見通してみたい。それを、①学力をどう捉え、どう育てるか、②コンピテンシーをどう捉え、どう育てるか、③学校と、学校を超えたスクール構想で、何が育ったか、何を育てたいかの視点から考える。

（２）吉田剛「ホールスクールアプローチによる学校経営の進展―気仙沼市立唐桑小学校のESD―」

　本提案は、ホールスクールアプローチ（WSA）について、津波で被災した気仙沼市立唐桑小学校の事例を紹介した。同小学校は、ESD探究学習でWSAデザインシート（WSADS）を思考ツールとし、その修正過程をPDCAサイクルの一環に位置付け、教員の意識改革や学校経営の質向上を促した。WSADSは「非認知能力」の可視化にも有効であり、地元を好きになり「自分の言葉で語り学ぶ児童」への成長が見られた。

（３）市瀬智紀「ホールエリアでの体験型探究学習を柱としたESDによる非認知能力の育成とその成果」

　ESDとOECD東北スクールとは、東北地方の学校実践と深く関連し、東日本大震災激甚災害地域と一部オーバーラップする。本提案では、まず震災後10年の東北地方ホールエリアでのESDの進展と成果を俯瞰した。次にESDによる非認知能力の育成とその成果を報告した。非認知能力の可視化として、因子分析を紹介し、「地域学習」と「考える力」と「つながる力」との関連性を示した。最後に課題として、非認知能力と学力の相関関係の可視化、そのための新たなデータサイエンスDS-EFAの必要性を指摘した。

（４）本図愛実「子どもの成長の可視化に向けて―『チーム』による挑戦―」

　全国学調は、項目反応理論の設計にはなっていないため、経年比較できないにもかかわらず、不用意に比較されている。また児童生徒の家庭背景（SES）との相関の高さを実証する研究が多く、SESを克服する個別の学校の効果が見逃されている。本提案はこうした問題状況を批判するDS-EFAの挑戦を紹介し、フィールドワークで得た効果的学校の効果を、新システムのグラフや共起ネットワークよって可視化した。

（５）三浦浩喜「OECD東北スクールとその後の後継実践」

　OECD東北スクールは、東日本大震災で被災した東北の中高生約100人を、被災地復興の担い手に育てる目的で、2年半にわたり「解のない問い」に取組ませた国際的な教育復興プロジェクトである。OECDからのミッションは「2年半後にパリから東北の魅力を伝えるイベントを開催すること」であった。この取組みをきっかけにOECDキーコンピテンシーを再定義するプロジェクトEducation2030が始まり、現在進行中である。本提案の前半は、OECD東北スクール（2012〜2014）、地方創生イノベーションスクール2030第I期（2015〜2017）・第II期（2018〜2020）、きょうそうさんかくたんけんねっと（2020〜）を紹介した。キーワードは「エージェント」「エージェンシー」。後半は、中学2年次からOECDスクールに参加し、後継プロジェクトも継続している福島大学学生本多美久さんをゲストに招き、当事者の生徒目線から、「学校の先生との壁」や「子どもと教師との対等な対話」「プロジェクト学習と教科学習との連動」を報告した。

（６）全体協議から未来へ

　エージェンシーという言葉の多義性、魅力と違和感の意見交換をきっかけに、学力／非認知能力をどう捉えるか、学力と非認知能力とは分離できるか、について活発な議論が交わされた。本多さんの参加と発信への反響が大きく、「子どもや若者も、この教育方法学会大会のエージェントである」という、本学会大会の新しい姿が見えた。　　　　　　　　（文責）田端健人